

イタリア・オペラ（107）傑作、「ノルマ」（ベッリーニ）

本文



巫女がオペラの主役に登場してくるのは、余りなかったことでしょう。古代の話しでは神話とか英雄が普通でした。巫女はヨーロッパの主流ではない、ケルト人を連想させます。神秘の世界です。ベッリーニはオペラの中に非日常的な世界を入れました。それは深い森から生まれたドイツのロマン派と似た世界と私は思います。

「時代は紀元前50年、もう古代国家ローマがイタリア半島を支配していたが、北イタリア、アルプスから北のヨーロッパはガリアと呼ばれ、そこにはケルト人が住んでいた。ノルマはケルト人の祭司（神の声を代弁し、政治の長でもある）階級の娘で、彼女は巫女の長だった。現実の支配者である父の行動も、彼女は神の声が聞ける立場で、制御できた。

ケルト人は現実の支配者であるローマ人の横暴を訴えるが、巫女ノルマは月の出をまって皆とともに祈る。アリア「清き女神」。忘れられない名唱。そして神の意思は「時期尚早」とローマ攻撃を抑える。

巫女は純潔を建前としていたが、ノルマはローマの提督ポリオーネと関係を持ち、秘密に子供を二人もうけていた。近頃彼の愛情が薄れたのに気づき、失われた愛の回復も神に祈る。

ローマの提督ポリオーネはノルマの部下アダルジーザに気移していた。彼女は巫女の身であることから悩む。更に彼が明日ローマに帰るのに同行せよと迫る。

禁断の恋の悩みをアダルジーザから聞いたノルマはわが身の過去を思い一旦は許すが、相手が自分の彼であったのを知って、絶望する。

ノルマは二人の子供を殺して自殺しようとするが、思いなおし、アダルジーザに子供の養育を依頼する。アダルジーザはポリオーネとの関係を絶つと宣言し、ノルマが彼と復縁するよう懇願するという。

ポリオーネにもノルマとの復縁をアダルジーザは懇願するが、聞き入れられず、ノルマは激昂。神殿の上のどらをたたき、集合した人々にローマ人を打てと命ずる。

そこへ聖なる森に入り込んでいたローマ人ポリオーネが捕らえてられてくる。全員は殺害を望むが、ノルマは自分がやると誓い、人々をさせ、二人だけの会話となる。ポリオーネはアダルジーザとの決別を認めない。

再び人々を集め、ノルマは自分が皆を裏切ったと事実をのべ、父に子供の養育を依頼し、自ら生贄の祭壇に登り、劫火の中に消えていく。これをみたポリオーネも彼女の気高さに感動し、自らも劫火の中に飛び込む。」

「ノルマ」はここ数年このオペラは来日イタリア・オペラ団の上演曲目に頻繁に入るようになりました。その一つを大宮でみましたが、舞台は粗末でもテオドッシュを中心とした立派な演奏でした。一度みたら分かりますが、このオペラは台本（フェリーチェ・ロマーニ）も面白く、歌もよい。曲の作りがそうになっているのですが、見るものと舞台との距離が消えます。ロシーニの古典劇の扱いと大変違います。森とか月とかいう設定と、歌手の歌い方が厚く、あるいは薄くて、聞き手の心情に直接的に訴えます。これは当時誕生したロマン派歌劇の特徴です。舞台と聞き手との距離があつてこそ、楽しめるロシーニ

ニの世界とは大変に違います。

1831年12月ミラノ・スカラ座の初演で、当日は問題があったものの、以降順調に受け入れられ、34回も上演が続いたといえます。

今もCD、DVDの種類は多いし、上記テオドッシュのノルマもあります。もう1人の主演アダルジーザ役を今やスターになったバルチェローナが演じたものもあります。「ノルマ」は一旦世から消えたのを復活させたのは MARIA・カラス。大変な難役です。

ベッリーニのオペラはベル・カント（美声）という言葉で特色が代表されるのが普通ですが、これでは少し足りないように私は思います。美しいだけでなく劇的強さといったものが声色に感じられる必要があります。ロッシーニとは違います。それがロマン派としてのベッリーニのオペラには必要です。それに彼のメロディの素晴らしさは特級です。

ベッリーニは早熟、早世の天才で、モーツァルトに似ています。1801年シチリアの生まれで、ナポリでデビューしたのは1825年。1827年にはナポリからミラノに向かっていきます。ミラノで当たりをとると、1833年にはパリに居を移して「清教徒、イル・プリターニ」（1833）を書きます。世事にも長けていますね。死は1835年です。

## イタリア・オペラ（108）「夢遊病の女」（ベッリーニ作）

### 本文

若い美人が意識を失ってさすらう、という姿は魅力的ではありませんか。このオペラでは野原で夜を明かしたり、婚約しているのに、他の男性の館のベットに入りこんでしまう夢遊女。幽霊が出るという噂は彼女が正体と分かって、そのため起こる混乱がオペラの主題です。ハッピーエンドになるからブッフアのようにもとれますが……。曲はショパンの夜想曲に例えられるほど、繊細です。

「水車屋の娘アミーナは金持エルヴィーノとの婚約を発表して、若者たちの祝福を受けます。彼を好きだった旅館のお上、リーザだけは浮かぬ顔。そこに気品ある紳士が現れ、村を懐かしみ、アミーナの美しさをほめる。褒められた彼女の反応をみてエルヴィーノは嫉妬する。

若者たちはこの辺りに幽霊が出ると紳士に訴え、注意を喚起する。

リーザは紳士を自分の宿に泊め、好意を抱き、彼の客室を尋ねる。仲よくしている最中、物音が聞こえたので、彼女は慌ててハンケチを落として逃げる。現れたのはアミーナ。彼女は夢遊病にかかっていた。これをみて紳士は事情を推察して彼女をベッドに寝かして立ち去り、リーザはエルヴィーノに告げ口に行く。

村人は紳士が元領主の息子で、幼児時に没われた伯爵であるのを知って、宿屋に彼を訪ねる。扉は開け放たれ、彼はおらず、ベッドにアミーナが寝ていた。リーザの報せできた婚約者エルヴィーノとアミーナの母は事態の深刻さに驚く。彼は婚約解消を宣言し、彼女の指から指輪を抜き去る。母はリーザの落としたハンカチを何気なく拾う。

アミーナの潔白は村人も伯爵も信じて、エルヴィーノに訴えるが、彼は伯爵への嫉妬で目が眩む。エルヴィーノは今度はリーザに結婚を申しこみ、リーザは喜び、アミーナは絶望する。そのとき、アミーナの母がリーザのハンカチをとりだし、彼女の尻の軽さを非難する。

最終幕では夢遊状態でアミーナが水車小屋から橋を渡ってくる。渡り終えて歌うアリア「信じられないわ」が人の心をうち、エルヴィーノは彼女の指に婚約指輪を戻す。目が覚めてアミーナが歌うアリア「ああ最高に嬉しい」でフィナーレとなる。」

「夢遊病の女、ラ・ゾンナムブーラ」は前回取り上げた「ノルマ」より前の1831年作、ミラノ・カルカノ劇場で初演されました。スカラ座がトラブルに巻き込まれていたからです。舞台は19世紀始めのスイスですから、当時の「現代物」ですね。いわば毒にも薬にもならない話しですが、良くぞ「夢遊病」などが題材になったと感心します。当時は1830年の7月革命で政情

おだやかならず、従って官憲の検閲が激しく、オペラの内容は特に監視され、削除、変更は日常の出来事でした。最初「エルナーニ」という政治的な話題をとりあげようと思ったけれど、五月蝍い検閲にかかるのは目にみえていました。当時の検閲の例として、よく上がるのはドニゼッティの「ルクレチア・ボルジア」があります。内容は殆んど変えずに、7つもの題名をへて、やっこの表題になったそうです。世事にたけたベッリーニにはこんな話しは残っていません。トラブルは最初から避けたのでしょう。

このオペラの美しさは大きくは弱音とゆっくりしたテンポにあります。ヴィンチェンツォ・ベッリーニはメロディの天才で、全体が流れるように歌われます。ロッシーニ時代のように、言葉が中心のレチタチーボは殆んどありません。ストーリーの説明には合唱が使われ、ソロや2重奏はアリアです。そのアリアが美しいメロディで歌われるのです。主役が夢遊病にかかっていますから、女はゆっくりゆっくり歩きます。駆ける場面などありません。だからオペラ全体が殆んど、ゆっくりしたテンポになって当然でしょう。普通なら見ていると眠くなる筈です。そうなっていません。名作です。

さて夢遊病ってどんな病気か、今話題の老人の徘徊と違うのか、平凡社の百科事典で調べてみました。概要を書きます。

「歯ぎしりなどと同じ睡眠時の異常現象。夜中に家の中や路上を徘徊し、ときには裸で歩いたりして、またベッドにもどる。両親や異性のベッドに入ることもある。翌朝は何も覚えていない。

持続は20～30分。夢のなかの行動のようだが、浅い睡眠時より、中程度の睡眠或いは深睡眠で起こる。神経症的な葛藤があって、それに対する反応らしい。」

私の見たDVDはフィレンツェ歌劇場のもので、エヴァ・メイがタイトルの役をやっていました。彼女は容姿端麗で、演技、歌もいい。この役にはピッタリだから、全体としてもいいオペラになっていました。彼女は屢来日し、この九月にもチューリッヒ歌劇場と「椿姫」をやります。今売れっ子のスターです。

イタリア・オペラ（109）ベッリーニの「ロメオとジュリエット」

本文

本当の題名は「カプレッティ家とモンテッキ家」。シェクスピアの「ロメオとジュリエット」は原作がバンデロのかいた小説とされていますが、これはダ・ポルトの小説「ロメオとジュリエット」に由来しているそうです。だから違う話であって当然です。前に「オテロ」の話しにでましたが、当時イタリアはシェクスピアに日本程の知名度がなかったから、同名異話がよくあります。

「法王派カプレッティ家（ジュリエット側）と皇帝派モンテッキ家（ロメオ側）が争い、二人の死に至る経過。カプレッティ家の主は娘ジュリエットとテバルトとの結婚を宣言、テバルトは喜ぶ。一味であるロレンツオ神父はジュリエットが皇帝派のロメオを愛しているのを知っており、結婚式の延期を図る。

ロメオはモンテッキ家の主で、カプレッティ家の息子が戦いで死んだことから和解を求める、その条件が自分が娘ジュリエットと結婚して、カプレッティ家の息子になるという虫のいい話で、主である父に申し出るが、勿論許されない。

ロレンツオ神父が二人を密かに会わせ、逃走を勤めるがジュリエットは気が進まない。

テバルトとジュリエットの結婚式となる。式場にはロメオと仲間が忍び込んで、機会を見て宴会を戦場にする。ロメオは花婿テバルトらに囲まれ万事窮すが、ジュリエットが止めに入る。予想外の展開にテバルトも父も驚き、そこに皇帝派の一味が現れ、ロメオを救う。

ロレンツオ神父は事態を救うには、ジュリエットが薬で一時的に死に、墓に入れば、そこへ自分とロメオが行って逃げる手段を考える、ことしかないと考え、彼女に勧め了解をえ、薬をのませる。父はロレンツオ神父を疑い、足止めにする。

計画に齟齬がうまれ、ロメオがロレンツオ神父に会えずにいるところにテバルトが現れ、二人は激闘、そこへジュリエットの葬送の歌がながれる。二人は戦いをしばしやめ、涙にくれる。

ジュリエットの墓に入ってロメオは彼女の傍らで毒を飲む。ジュリエットは生きかえったが、時既に遅く、瞬時の別れをつげ、ロメオはジュリエットの膝の上で息絶える。」

シェクスピアと比べ悲惨さが弱い台本です。テバルトは死なないし、私が見た DVD ではジュリエットも死んだかどうか、曖昧でした。

音楽は力強く、ベッリーニが美声オペラだけでなく、劇的な盛り上がりを用意しているのがわかります。私の DVD(チオフィ主演, イタリアの南の端、マルティーナ・フランカでの 31 回ヴァッレ・ディートリア音楽祭) ではロメオ役を女性がやっていたから、伝統的な高音美追求型のものであるのはわかりましたが、感情が激しくぶつけられている感じで、ロッシーニまでと違ったロマン派オペラになっていました。不思議なのは剣ではなくピストルが武器でしたから、最後、ロメオが死んで、彼の剣を使ってジュリエットが死ぬ場面が曖昧になったことです。ずっとジュリエットの膝にロメオが乗っていましたからね。

ベッリーニが書いたのは「夢遊病の娘」(ミラノ)の一年前、1830年で、ヴェネチアで初演されました。この芝居は近くの都市ヴェローナが舞台です。この時代、まだロッシーニの頃と同じように、作曲家は都市から都市へとオペラを作りながら移動して暮らすという仕来りでしたが、ベッリーニは処世の術にたけていて、金をかせぎが上手でした。1929年初演の「ザイーラ」では5000フラン(1135デュカート)を得ましたし、1931年の「夢遊病の女」では2400デュカート(約10000フラン)でした。「カプレッティとモンテッキ」は8000リラとされています。ロッシーニがフランス政府相手に起した年金闘争で獲得したのが6000フランですから、ベッリーニのオペラ制作費はかなりの値段です。

ベッリーニが大変な天才であったのは間違いありません。1801 年生まれの彼は 1826 年、2 作目のオペラ「ビアンカとジェルナンド」で認められ、ロッシーニとの仕事で有名なバルバイアの推薦でナポリからミラノへ移動しています。スカラ座での仕事は 27 年 10 月の「海賊」でした。これが大当たりをとったので、この 26 歳になったばかりの青年はかなり高慢になったようでした。このあと、ジェノバに開場した劇場のために、前記「ビアンカとフェルナンド」の改作を書きました。契約が 1828 年 2 月でしたから、演奏会の 4 月 7 日では間に合わないという理由でした。

更に新たな契約がバルバイアのスカラ座からきました。契約額は 1000 デュガードだったそうです。その前の作は 500 デュガードでしたから大変な出世です。作品は「異国の女」として発表され、1829 年 2 月初演で大成功しました。そのあとが前記「ザイーラ」で失敗作だったそうです。

ベッリーニの作品は数少ないけれど、今もその殆んどが CD で聞けます。魅力に富んでいる証拠です。美しいし、感動的なものもあります。しかし、私は思うのですが、「ノルマ」を除くと、イタリア歌劇と別の世界で仕事をしていたようです。語り、歌うという原則が消え、語りは状況説明として合唱が担っています。次回話題になる「清教徒」も同じです。

## イタリア・オペラ史 (110) 「清教徒」

### 本文

「清教徒」はイギリスを思わせる名前。17 世紀に議会政治が危機に瀕したとき、王党派に対抗した議会派が清教徒でした。だからこのオペラが宗教的或いは政治的かという点、殆んど関係はありません。「夢遊病の女」のように狂乱を売り物にするオペラです。政治的にはいい加減。

本来は専制的政治で議会を無視して政治を進める王に対し、強烈な反対をする議会派が王の権利を制約していく、激烈な対立があったのですが。政治に



距離をおきたいベッリーニがまともに取り上げる筈ありません。

「主役は恋仲のエルヴィーラとアルトゥーロ、仇役はリッカルド。リッカルドはエルヴィーラの父から娘をやるといわれていたのに、簡単に取り消される。清教徒の世界に1人王党派だったのがアルトゥーロ。城には1人秘密の客がいて、彼女が王の後だと知って、アルトゥーロは彼女を自ら案内し逃がすため、エルヴィーラとの挙式をスッポ抜かす。これが引き金となって、エルヴィーラは発狂。アルトゥーロは無事帰国したが、エルヴィーラの発狂を知り、当惑。遠くから彼がエルヴィーラに教えた恋の歌が聞こえてきたので、密かに呼びかけ、彼女に事情を説明、ここでエルヴィーラは正常にもどる。そこに清教徒軍が現れ、アルトゥーロを逮捕、死刑を宣告、彼女は又発狂する。処刑寸前に、王党派が敗れた知らせが入り、彼は許される。エルヴィーラの発狂は又も直り、二人は結婚する。」

どうもやりきれないほど、適当で、こんな筋が認められたかと驚きますが、旋律はまことに美しく、また難曲です。最初の公演では、後日清教徒カルテットと呼ばれるほどの名演をした、グリーン、ルビーニ、タンブリーニ、ラブラーシュの4人で行われました。1835年1月24日パリのイタリア座つまりロッシーニがかって座長をしていた劇場です。文句ない成功を治めました。演奏は17回続きました。

100年後の話、天才歌手マリア・カラスのデビューがこの曲であったのは存外知られていません。彼女の夫、メネギーニの著書によると、「無名時代のカラスに1949年1月10日夜電話がかかってきた。もう寝込んでいたのに、名指揮者セラフィンからであったので、メネギーニはカラスを起こし、下に来ていた、セラフィンらと会った。大歌手カローギアのためにヴェニスフェニーチェ座が「清教徒」を企画したのに、彼女が急病になった。開幕まで9日しかない。困り果てたセラフィンは2流の歌手をあたったが、駄目。最終的に当時デビュー仕立てのカラスに白羽の矢をたてた。しかしその時彼女

はワーグナーの「ワルキューレ」を歌っていた。カラスは返答の猶予を一日もらい、「清教徒」の譜読みをした。そしてイエスと答えた。彼女は1月12, 14, 16と3回「ワルキューレ」を歌った。そして殆んど白紙状態だった「エルヴィーラ」役を暗譜し、1月19日に初日をむかえた3回の「清教徒」をこなした。」

彼女の「清教徒」後刻、1953年3月4日にEMIに全曲録音しています。

このCDのほか、私は二つのDVDをみました。一つはRAIの放送録画で、冴えた演奏ではありませんが、グルベルローバがスペインのバルセロナでやった録画は十分納得のいくものでした。

ベッリーニがパリに登場したのはこれが最初の最後でした。「ノルマ」のような名作も初演はミラノでしたし、そのあとの「テンダのペアトリーチェ」はローマでした。1833年パリに登場し、格好いい独身男性としてパリの社交界の寵児になりましたが、当然彼はロッシーニから作品を頼まれるのを期待しました。4月11日に伯父への手紙にみても彼の気の入れようは格別でした。ところがドニゼッティに依頼するらしいという噂が入り彼一流の嫉妬深さが闘争心を掻き立てました彼はそのため、ロッシーニの愛人オランプと仲良くなり橋渡しを依頼したのです。1834年依頼はきました。しかし同時にドニゼッティにも依頼はきました。

はじめに上演されたのは「清教徒」、3月にはドニゼッティの「マリン・ファリエーロ」で、「清教徒」が圧倒的に成功しました。

その彼が次の行動にでません。やがて、彼が病気だという噂がたちます。故郷に帰ったという噂を確認に、シチリアの自宅に大使館から人が派遣されます。追い返されます。そこで医者が派遣されます。博士は9月20日に重態との診断結果を公表します。そして9月23日にはベッリーニは死亡しました。はじめコレラという噂が立ちましたが、「慢性的アメーバ感染症」ということでした。

ロッシーニが厳粛に葬儀を取り仕切り、被害妄想的な性格など露しらず、ドニゼッティは彼のために「レクイエム」を書いて、記念葬儀の指揮をしまし

た。その3日後の9月26日に、ナポリのサン・カルロ劇場で、自らの傑作「ランメルモールのルチア」が初演され、ドニゼッティの名作は不滅になります。

イタリア・オペラ(111)「アンナ・ボレーナ」(ドニゼッティ)

本文

ガエダーノ・ドニゼッティ(1797~1848)はイタリア北部のベルガモで11月29日に生まれました。正しくいうと、そこは当時オーストリア領でした。彼が生まれた年、ベルガモ共和国が3月~7月にはあったのですが、その前はヴェネチア国、それ以後はチザルピーナ共和国となり、オーストリアの支配下にあったのです。騒然たる社会の貧しい家庭にガエダーノは生まれ、貧しい暮らし、穴倉の生活と比喻されますが、そんなところに大天才が生まれました。その不思議さを私は思います。音楽は素質といわれ、素質は遺伝と考えられがちですが、彼は靴屋の子。(この頃のイタリア半島にはオペラの遺伝子が濃密にばら撒かれたようです。)彼は「ノルマ」のベッリーニより数年前の生まれですが、ベルッリーニが早熟早世のせいで、ドニゼッティを後に紹介する方が都合がよいようです。二人ともロマン派の草分けです。イタリア・オペラでjはロマン派は器楽より遅れて登場しましたが。

「アンナ・ボレーナ」(1830)はドニゼッティの出世作です。でも34番目につくったオペラです。彼は生活を支えるために、沢山のオペラを書きました。ロッシーニオペラが全盛期でしたから、そこに新しい風を入れるのは難事です。世に認められたのがこれで、今ではロマン派オペラと呼ばれています。題材に神秘の影がさすという、ベッリーニのようなものではありません。ここに登場するのは、アンナ以外は俗物です。どんな宮廷にもある我利我利亡者の集団です。

彼はこの作品をコモ湖畔にある名ソプラノ(ジュディエッタ・パスタの別荘)で仕上げました。

「主役であるアンナは 16 世紀イギリス王ヘンリー 8 世の第二后。有らぬ嫌疑を理由に愛人セイモアを第 3 皇后とする皇帝の企みがオペラの主題である。アンナの不倫の理由にあげられた人物はアンナの以前の夫ペルシー卿、セイモアはアンナの性質を知っており、彼女をおいて第三后になるのを拒む。王は意図的に不倫をつくりあげ、セイモアを口説く。アンナはペルシー卿への愛を胸に抱きながら、毅然として彼を拒否する。



名花パスタの像

彼らはみな身を引くからアンナの嫌疑を解くよう王に頼む。アンナは自らの不倫を精神的にも一切認めず、最後、王と第三后との挙式のざわめきを聞きながら死に赴く。」

このオペラは筋が極めて単純で、格別優れたアンナのセリフは感じられません。台本を書いたロマーニは過労気味なのか、愛、嫉妬、名誉、裏切りなど、俗臭がただよ感情が表明されるに過ぎません。しかし名演奏ではそれらが

ぶつかって出て来る、「ロマン派的色彩」が聞くものを魅了します。多くのソプラノが挑戦しましたが、かつてのパスタ、今マリア・カラスが燦然と輝いています。

私がみたのは、テオドッシュという今様マリア・カラスと呼ばれているソプラノのものです。

「アンナ・ボレーナ」は今ヴェルディを知っている耳の我々がきくと、延々とアンナのアリアだけが続く単純なオペラに思えます。ドラマとはとても私には思えません。しかしベッリーニに言わせれば、「内的で力強く、しかも情緒豊かな感情に満ちた、模範的なメロドラマ」ということになります。ベッリーニはこんな台本を書いたロマーニに嫉妬します。彼は憎悪の想念に満ちた性格です。

同じ劇場で10カ月あと、ベルリーニの「夢遊病の女」が初演されますが、これもロマーニが台本を書いています。スカラ座が運営の危機にあったから、歴史にのこる名作が続けて、同じミラノのカルカナ劇場で上演されたことになります。



マリア・カラス

当時混迷の只中であって、オペラが思想を表すなどと誰も考えず、その日の糧をえるためのものでした。そんな風潮のなか、今のイタリアの独立に強く寄与したマッツィーニはドニゼッティのオペラをこう表現しています。

「わけのわからぬまま無視されてきた登場人物の個性が、彼の多くの作品の中では素晴らしい迫力をあげている。〈アンナ・ボレーナ〉は、一種の音楽的叙事詩に近いオペラなのである。」

この言葉から想像できるように、ベッリーニとは違ったオペラが登場したのであり、彼は「アンナ・ボレーナ」で真の国民的名声を勝ち得ました

## イタリア・オペラ史(112)「愛の妙薬」(ドニゼッティの惚れ薬)

### 本文

バスク地方の話。恋を誘う媚薬の話は沢山ありますが、これほど微笑ましいオペラはないし、作中に出てくる「トリスタンとイゾルデ」も媚薬の話です。当時ワーグナーの楽劇「トリスタンとイゾルデ」は未だ出来ていません。ドニゼッティは誰にもかけない優れたブッフアを書く才能をもっているらしく、晩年にも「ドン・パスクワーレ」を書いています。

「アディーナは美人で教養もあり、ネモリーノは彼女に惚れきっている。彼女は「トリスタンとイゾルデ」の物語りを読み、その惚れ薬の効用に賛嘆、周りの皆に紹介する。そこへ小太鼓の音とともに、ベルコーレ軍曹率いる小隊が現れ、アディーナの美貌に目をつけ軍曹は早速に求婚する。皆の去ったあと、ネモリーノとアディーナが残り、彼はもじもじと求婚する。野暮な口説きをからかうが、どこかでアディーナも好感を持つ。

ラッパとともに、イカサマ薬売りのドゥカマーラが登場、薬を売りつけ、商売が終わって皆が散ったあと、ネモリーノはイゾルデ姫の愛の媚薬をもっているかと聞く。彼は安物の葡萄酒を売りつけ、明日から効果が出ると効能を述べる。媚薬を飲んだ、ネモリーノは急に自信をもち、アディーナが来ても

以前とは違ってオドオドしない。アディーナは自尊心を傷つけられる。彼女はあてつけにベルコーレと結婚すると宣言。ネモリーノは明日は薬が聞くと樂觀、そこへ事情が急変し、ベルコーレは今日中に結婚をと迫る。ネモリーノはそれは困ると大騒ぎ。

アディーナとベルコーレの結婚式が急に開かれるが、アディーナはサインを今晚まで待ってと頼む。ネモリーノはもっと薬を飲まなくてはと、ドゥカマラーに頼むが金がない。そこへベルコーレの誘いにのり軍隊に入って、前払い金を受け取り、惚れ薬を買う。

村の娘たちはネモリーノの伯父さんが死んで彼に大変な遺産が入ったことを知り、皆が色目をつかうが、ネモリーノは薬が効いてきたと誤解。アディーナはドカマラーからネモリーノが自分の体を兵役にうって薬を買ったことを知る。彼女は感動して兵役の契約書を買戻しに走る。この様子を影でみていたネモリーノは彼女の目に涙が光ったのを見、名作「人知れぬ涙」を歌う。(ここは見る者の涙を誘う) 契約書を取り戻し、彼に渡し「村にいて」と頼むが、それでも愛しているといわない。「愛していないなら、兵隊へ行く」といわれ、ついに意地を張り切れなくなったアディーナは愛を打ち明ける。」

大変長くなったが、微妙に出来ている作品であって、これ以上省略すると面白みが消えます。

「アンナ・ボレーナ」と同じロマーニの台本で、ミラノのカノッピアーナ劇場で1832年5月12日に演奏されました。ドニゼッティは恐らく最初は秀作を書いたとは思わなかったらしい。5月16日の手紙ではこう書いています。「新聞は「愛の妙薬」について批評し、とてもほめています。褒めすぎ、本当に褒め過ぎ・・・だと私は思います！」

「人知れぬ涙」は数年前に出来ていたそうである。それをこの場所に入れるため、彼はロマーニにしつこく要求した。それに何ということだろう。このアリアのすぐ前にファゴットでメロディをだすのだ。ファゴットの音色で

なくては出ぬ悲しさ。感心するほかない。

ロマーニは晩年になって、若い娘エミーリア・ブランカと結婚しています。ブランカは若いドニゼッティの思い出をこんな風にかけています。

「あの方がご自分で作曲したものなど、わけてもナポリ風の短い曲や歌曲を、ブッフアもののユーモラスな、まことに陽気なやり方で、それを自らピアノを弾きながら実に見事にお歌いになるのです。本当にお上手でした。--]

私が見たDVDは最近のネトレプコとヴィラソンのものと、パバロッチェとバトルのものです。前者は今売れっ子同士ですから、少しトーンを下げて感想を書く必要がありますが、それを考えに入れてもいい演奏でした。去年のザルツブルグ人気の前にウィーン国立歌劇場でのもので、ネトレプコはこういうオペラの方が合っています。人気の椿姫は例外でしょう。彼女は陽性で、笑い上戸と思った方がいいようです。ヴィラソンははまり役、彼の演技は抜群です。

パバロッチェも面白く見られます。何せ彼の高音は圧倒的ですから、「人知れぬ涙」が泣かせるのはいうまでもありません。彼の体型をみるとどこか、ネモリーノに同情する気を亡くさせますがね。

## イタリア・オペラ史 (113) 妖艶な后「ルクレチア・ボルジア」

本文

ボルジアは法王の一族です。父アレクサンドル 6 世は一世を風靡した大法王でした。彼が人妻ヴァノッサと恋をし、産んだ 4 人の子供の 3 番目がルクレチア 1480 年生です。ヴァノッサの子供は皆政争の具となりました。

ルクレチアは 13 歳のとき、ナポリと関係があるペーザロ伯爵スフォルツァと結婚します。華やかな宴とは裏腹に、花嫁の生活は前日までとかわらず、世に「白い結婚」と呼ばれます。結婚の必要がなくなったとき、二人は別れさせられます。ルクレチア 16 歳の年で、「ルクレチアとの結婚は、夫の不能



力によって実際には遂行されなかった」との一札をペーザロ侯はとられます。次が従者との密かな結婚。これは身ごもり出産、相手ペドロは兄チェザーレに殺されます。

1498年ルクレチアはナポリのアラゴン王子ピシェリ公と結婚、しかし彼は気が弱く出身地のナポリとローマとの関係に不安を感じると故郷にかえったほど、またナポリとフランスの関係が悪化すると、ローマの妻のもとに帰って法王のご機嫌をとったのです。しかしそれも甲斐なく、1500年ピシェリ公は兄チェザーレがナポリとの絶縁を決意し殺されます。

次の結婚はフェラーラ公国のアルフォンソ・デステです。彼は個性的な一生をおくり、ルクレチアとの結婚は20年続き、チェザーレ死後の12年に子供が5人できます。

チェザーレ生存中のルクレチアは落ち着かない生活をし、詩人ヘンポや義兄フランチェスコと激しい恋をして世間を騒がせます。

ボルジア家は法王とチェザーレの死によって没落します。一見奔放な一生のように思われますが、兄の死とともに平凡な生活が始まったのですから元来が兄に支配された、可愛い女性だったのかもしれませんが。オペラは兄生存中のできごと、ユーゴーの作品、これだけ知識があると、オペラへの期待も高まります。

オペラ「ルクレチア・ボルジア」は台本はロマーニ、政治的に差し障りが多い作品であり、多くの箇所で見聞にかかり、また裁判が起きました。ちなみに表題は「ルクレチア・ボルジア」のほか7種の題名が使われ、上演されています。

「フェラーラはイタリアの都市、国といった方がいい。王妃は秘密の息子がいるのを知っている。大公は事情を知らない。

プロローグはヴェネチアのグリマーニ家の舞踏会。酒に酔って露台で居眠りするジェンナーロ、其処にマスクをつけた大公妃ルクレチアがゴンドラにのって現れ、顔をのぞくき美しさに口づけする。彼は美人の大公妃に釣られて、

身の上を話す。彼女は息子とする。フェラーラに赴任するヴェネチア大使の随員士官が集まり、その1人オルシーニは大公妃の正体をみやぶり、悪徳の女と彼女を侮辱する。オルシーニは女性のアルトで歌われる。

幕が開くと、フェラーラの広場で、大公妃の秘密の息子ジェンナーロが他のヴェネチアの隊長と、いさかいを起し、ボルジア家の宮殿の紋章からBを削り、orgia（淫蕩な宴）として侮辱する。これを大公と大公妃が知り犯人を呼び出す。

アルフォンソ公爵の宮殿に現れたのがジェンナーロ、大公妃は驚くが、事情を知らない大公は死刑を宣告。大公妃は処刑の方法を任せよと主張、認めさせ、毒殺とする。呼び出されたジェンナーロは事情を知らずに大公の勧める毒杯を飲み、大公退席のあと、大公妃から毒薬であると教えられ、毒消し薬を与えられ、飲む。

二幕はネグローニ邸、彼が活着しているのがわかり、第二の殺害計画が企てられる。宴が進むにつれ、ヴェネチアの6人とフェラーラの1人グベッタだけになり、ジェンナーロは酒について疑うが、他の人は忠告を無視、フェラーラの1人は巧みに酒をこぼす。そのとき不気味な雰囲気になり、明かりが消え、扉が閉まり、正面からルクレチアが現れる。彼女は毒杯である事実を知らせ、オルシーニらによるヴェネチアでの侮辱への恨みで5人の死を告げ、死体を包むカーペットを準備させたという。息子ジェンナーロには用意した毒消しを与える。彼は自分だけ生きることがいさぎ由とせず、飲まずに大公妃に襲いかかる。大公妃は彼が息子である事実を教えるが、彼は死ぬ。そこに現れた大公の前で、ジェンナーレは自分の息子と訴え、倒れる。」

ドニゼッティのオペラは、中心となる人物の性格がさまざまに引き起こす事件を扱う。だから中心人物の性格が十分に分かっていないと面白くない。このオペラでもオペラだけの知識では人物の性格を十分に説明していませんが、上記のようにルクレチアの背景にある、生い立ちや歴史がわかると、オペラで取り扱う、人物の妖艶さが予想できて、大変に面白い劇の進み方にな

ります。私たち日本人がイタリア・オペラを理解するには彼らの歴史をわかつのが大事な一例です。(本説明は塩野七生著「ルネッサンスの女たち」参照)。

なおこの話題にはカタルシスという考え方が背景にあります。悪行を積んだ人間も最後にひどい苦しみにであうと、悪行は消えるとする考えで、悪徳のルクレチアも最後にわが子を殺すというひどい苦しみに、救われると、というのがこのオペラが言いたいことらしい。私の知識では本物のルクレチアは我が子を殺していないけれど。

見た DVD はサザーランドとクラウスの大変古いものですが、BBC の作品であり面白くみられました。舞台に格調があつて、ドニゼッティがイタリア・オペラの正当な後継者であるのが、わかりました。なおサザーランドとクラウスは優れたドニゼッティ演奏を幾つも残しているのは幸運なことです。

イタリア・オペラ史(114) 女王の断首刑「マリーア・ストゥアルダ」

本文



ナポリ サンカルロ歌劇場

イングランドとスコットランドは地続きです。今はスコットランドの首都エジンバラとロンドンの特急でつながっています。しかし二つの国は民族的にも違うから、一緒になるには長い年月が必要でした。それにイングランドは

昔ローマに占領され、文明が高いとの自負があります。15～16 世紀は争いの最中でした。このオペラはその頃のはなしで、二人の女王の争いを描いています。

「舞台は 1587 年のイギリス。イギリス王エリザベッタはフランス王からの結婚申し込みに悩む。幽閉しているスコットランド女王ストゥアルダの処遇をめぐって周囲はもつれている。タルボ卿は赦免を申し出、国の安泰を願うセシル卿はイギリス王を狙った謀反人として死罪を進言。エリザベッタ女王はレスター卿にフランス王の申し出受諾を告げ、彼の反応をみるが、何もない。彼女はレスター卿に気があるが、レスター卿はストゥアルダと密かに結婚の約束をしていたから当然。レスター卿はエリザベッタ女王にストゥアルダと会ってくれるよう嘆願する。

フォルテリング城内にはストゥアルダが幽閉されており、そこへ狩を名目に、エリザベッタが訪ねる。その前にレスター卿がストゥアルダと会って、女王に赦免を懇願するよう助言する。二人があい、ストゥアルダは赦免を懇願するが、女王はレスター卿への嫉妬から、ストゥアルダが以前夫を殺害し、殺害者と不貞を働いた事実をあげつらい、彼女を辱める。彼女は女王に庶子であるエリザベッタには王座を継ぐ資格はないと叫ぶ。二人は異母姉妹である。頭にきた女王はストゥアルダの逮捕を命じる。

フォルンテリング城でストゥアルダ処刑の準備が進み、僧になったタルボにストゥアルダは罪を告白、ただ、自分はスコットランドに罪を犯したが、イングランドには無罪であると主張する。音楽は極めてうすくなり、クラリネットが哀切のテーマを、ファゴットは死の雰囲気を漂わす。ティンパニーは死の恐怖を。女王がおつきの者に別れの挨拶を述べ始めて、聞くものはオペラであったのにホットする。レスター卿との別れをへて、ストゥアルダは処刑室へ入っていく。」

名作である。

1800 年に作られたシラーの作品のイタリア語訳を原作とし、バルダ - リが書いた台本による、と書くのが普通ですが、検閲以前はこうでした。検閲後

1834年10月7日にナポリのサン・カルロ劇場で上演されたのは「ブオンデルモンテ」という題のオペラ。内容はかなり違っていました。祈りは陰謀になり、処刑される女は男になり、判決を下すものは下される者になってしまった。こんな修正をやっていたので上演は10月18日に延期されました。どうしてこうなったのか、理由ははっきりしませんが、ナポリ王妃が題材と関係する家系から嫁にきたのが絡んでいるようです。それでもナポリの聴衆から拍手をもらいました。本来のタイトル「マリーア・ストゥアルダ」は1年後ミラノのスカラ座で上演されたそうです。

ドニゼッティが一つのオペラの作曲にかかったときから、ドラマの雰囲気や物事について熟考してできたのは稀だったそうです。オペラ作家という「哀れな職業」は台本作家からちょこちょこ詩がとどくたびに、少しずつ断片的に曲を書くという習慣になっていました。だから彼が登場人物の心に辿り着けるなどということは殆んどおきなかったようです。稀ではあるが辿りつけたとき、彼の創造物はオペラのアンナ（アンナ・ボレーナ）であり、マリーア（マリア・スチュアルダ）であり、レオノーラ（ラ・ファボリータ）となったのでしょう。このオペラは稀な例の成果だと思います。

絞首刑がオペラの題材になる、しかもその直前の描写が最も感動的であるのは予測できませんでした。二人の女王の確執は極めてオペラ的な表現で、平凡ですが、18年間幽閉していたスコットランド女王ストゥアルダの殺害をエリザベッタ女王が決意して、オペラは最高の表現となり、見るものの息を止めます。その場面での音楽的表現はロマン派の巨匠達だけにしか表せなかった、あの「恐怖」の刻印が見られると私は思います。ドニゼッティの前にはシューベルトが晩年のピアノ曲で、後のショパンのピアノ曲でしか感じられないものです。

私が見たDVDはレミーニョとガナッシの競演で、前者の演技がみごとでし

た。舞台はベルガモのドニゼッティ劇場で装置は粗末ですが、2002年の製作でしたから見られました。今はこれ以外でていないと思います。

せわしい作曲生活になれていたドニゼッティにも1833年には陽が差してきました。「ルクレチア・ボルジア」が大ヒットになったので、ナポリ王は彼を「月給400ドゥガートで王立音楽院の対位法と作曲」教授に任命しました。これは大変な名誉です。更によいことがおきます。パリのロッシーニからイタリア歌劇場のためにオペラを1本書くというお声がかかったのです。地味なドニゼッティにとって夢のような話でした。この作品は報道のあった直後のもの、名作が生まれた背景にはこんな事実があったのは確かです

#### イタリア・オペラ史 (115) 「マリン・ファリエーロ」 (総統の革命)

本文

ローマの1000年王国は有名ですが、ヴェネチアも500から1900年まで共和国を築きます。その半ば1355年の実話で、総統が貴族社会の腐敗を嘆き、革命を意図するが裏切られ、処刑される史実です。バイロン(1828年作)の戯曲をデラヴィーニエが翻案し、オペラの台本としたのは最終的にルッフィーニです。

「貴族ステーノが自分の注文したゴンドラの製造の遅れを非難したのをイザレッコが弁明、貴族を中心とした命令社会に大勢が不満をいたっていたのがわかる。おおくの仲間もこれに同調していた。夜、総督ファリエーロ宅にイザレッコが訪ね、貴族の腐敗をなげき、互いに協力して、平民を中心とした政府を作ろうと合意した。イザレッコは仲間のカレンダーリオの協力もえられるとし、800人の反乱軍が出来ると見込んだ。

総督の妻エレナは総督の親友フェルランドと不倫、更に貴族40人委員会のステーノとの噂も立てられている。10人会議の舞踏会の日、反乱の計画が

練られる一方、妻はステーノの接近を恐れている。総督はこの席にステーノがいたことを知り、二つが一緒に腐敗の種をまいたことをしる。

エレナとの離別を決意したフェルランドはステーノに決闘を申し込み殺される。同時に反乱は実行に移されたが呼びかけに応じた人が存外少なかったこと、元首が加わっているのが知られていなかったことなどがあり、噂ももれた。10人委員会の諜報網が働き、参加者が逐次逮捕され、首班格の二人が、裁判を受け、絞首刑。総督も1日の裁判で斬首が決まった。妻エレナは総統の親友との不倫を刑に向かう夫に告白。夫は神が裁くと割り切り断頭台に向かった」

かくして陰謀は未然に抑えられ、多くの芸術家の空想を呼ぶ事件となりました。ヴェネチア・パラチノ・デユカーレの大部屋にある歴代の総督像のうち、ファリーロの肖像がある筈の場所は今も黒い幕が張られています。

オペラは1835年3月パリで上演されました。ドニゼッティとしてパリは初めてで、ロッシーニの依頼になる作品です。ベルリーニが「夢遊病の女」で1月に成功した後の作品でしたから、ドニゼッティとしては大変長い時間をかけた自信作でした。聴衆の反応もそんなに悪くは無かったのですが、ロッシーニと一緒にみたベルリーニの批判はひどいものでした。

後の評判もそれほどよいできのオペラではない、ということになっているようです。ただ、部分的にはオーケストラに肌理細かな工夫がある一方、フランス式「叙情悲劇」に対抗するイタリア式「叙情悲劇」の創作を意図した気配も見られるのが評価されています。舞踏会を陰謀の場所にしたり、「愛のストーリー」が背景に押しやられ、ヴェネチア市民に仕掛けられたクーデターという政治的な話題が前景となっているのが高く評価され、ジェノバの愛国者マッツィーニは著書でドニゼッティを開花していない天才とたたえているほどです。

私の見たDVDはベルガモのドニゼッティ劇場の公演で、どうも高い水準で

はないと思ったし、エレナ役のマリチェラ・デビーア以外は余りいただける演技ではありませんでした。

イタリア・オペラ史(116) 狂乱の代表「ランメルモールのルチア」

本文

ネットでグーグルの衛星写真を穴のあくほど見つめると、スコットランドの南東、イングランドと国境近くにコックバーンズパスという都市があります。そこから西南西に 50 キロ、ランマームア 丘陵が続きます。キャスル・パーク・ゴルフ・コースの見えるあたり、その南に広がる台地が、ランメルムア丘陵でしょう。今もキャスル・ガーデンという名がありますが、写真にキャスルは見あたりません。

列車でロンドンから東海岸沿いに走ると、うんざりするほど続く草原はこの当たりで岩山となり、木が生えてきます。うっそうとした森林というほどではありません。

このあたりが「ルチア」事件の発生地でしょう。事件は本当にここであったそうです。

1669 年と推察されています。初代ステア卿の娘であるジャネット・ダルリングはひそかにレイヴンズウッドのラザーフォード卿と婚約していました。2 人は誓いの印として金貨を割って半片づつをもっていました。彼女の両親は、バックロー家のデイヴッド・ダンバーとのご都合主義的な政略結婚を彼女に強いました。花嫁は婚礼の式場の一室で彼を殺したということです。(8 月 24 日とされている) 中から聞こえてくる、すさまじい絶叫に驚いた両家の家族と来賓たちが、ドアを蹴破って入ると「彼女は肌着姿のまま血にまみれて暖炉の端で、歯をむき出してにやりとし、わけのわからないことをしゃべりまくっており、完全に気が狂っていた」のをみたそうです。

この事件をネタにスコットが「ラマームアの花嫁」を小説とし、更にカンマラーノが台本を作ってドニゼッティが不朽の名作としたものです。(公演



は 1835 年 9 月 26 日、ナポリのサン・カルロ劇場)

「城主エンリーコは仇敵エドガルドを倒すため、妹ルチアに政略結婚を強いるが応じないのに困っている。部下の話で彼女はそのエドガルドに恋をしている。二人は夜明けに密かに出会っていたが、エドガルドはフランスへ行かねばならぬという緊急の知らせ、彼らは指輪を交換し、妻であり、夫であることを誓う。

城主エンリーコはエドガルドの偽の手紙を部下に作らせ、彼の不実の証拠として、ルチアに結婚を諦め、彼の選んだアルトゥーロと結婚せよと迫る。エドガーと連絡がとれないまま、家庭教師の勧めもあって、ルチアは諦めの気持ちになっていく。

城内の大広間で結婚披露宴はたけなわ、ルチアは誓約書に無感動にサイン、そこへ突如エドガーが侵入、ルチアは愕然、彼はルチアの結婚のサインをみて本物か確認し、指輪を抜いて叩きつけルチアは余りのことに気も狂わんばかり。

エドガルドが城にもどっているところにエンリーコが追ってきて、明日未明エドガルドの先祖の墓前での決闘を誓う。一方祝宴が続くが、ルチアが新床で夫を殺害し、血まみれの手で宴会場で狂乱の aria「あの方のやさしいお声が聞こえる」を歌い倒れる。

エドガルドはエンリーコとの決闘を待つところに、ルチア発狂の噂が伝わり、エドガーは「愛する人よ君は先に天へ行ってしまったのか」と歌って自刃する。」

DVDはクラウドとサザーランドがメトロポリタン・オペラで演じたものが大変に優れた演技で、格調の高いオペラとなっていました。「ルチア」はランメルムアーと地名などいれずに、「ルチア」で通じているくらい、このオペラは有名で、沢山のDVDがでていて、マリア・カラスのCDもあります。狂乱の場が最高の見せ場であり、20分は続くが、ここでは声がフルー

トと競り合ってフルートが色あせるほど、人声の美しさを聞かせます。初めて見た感想を今も覚えています、異常な高音の美しさに精神的に狂わされ



ルチアに扮したマリア・カラス

てしまいました。しかし慣れると音楽としても大変よくできているので、ここだけをかけても十分楽しめます。

狂乱の歌は凡そ次のような内容です。でも色々なDVDをみると少しずつ違ってきます。代々のソプラノがあらん限りの力を出して、発狂寸前の状態まで自分を追い詰めています。今の名歌手ナタリー・デセイの映像など、殆んど胸もあらわになっていますから、そんな状態からうたは歌詞が原作と違ってても許されることでしょう。

合唱「あの方はお墓からでてきたようだ」

ルチア「あの方の声のやさしさいひびきが

私のところをうちました。ああ！あの声が。

私のところにしみこみました！

エドガルド！私はあなたにもどってきました

略

亡霊が亡霊が私達をひきさくわ

隠れましょう、エドガルドこの祭壇の下に

略

バラの花がまいてありますわ！ 天上の美しい音楽が

ねえ、聞こえませんか！ ああ！ 結婚の賛歌がかなでられていますわ

よ

私達のための儀式が、整えられています！ 幸福ですわ。

略

司祭様がいらっしゃる 右手を差し伸べて アア、幸福なこの日

とうとう私はあなたのもの

神様が私に下さるのね

(マリア・カラスの「ルチア」パン

フから)

イタリア・オペラ史 (117) 「ピーア・デ・トロメイ」

本文

1260年、中世イタリア・トスカーナの悲しい小さな話です。フィレンツェの南、美しい都市シエーナでおきた話。党派間の争いに巻き込まれた貞淑な妻の悲劇。

「トロメイ家から嫁にきたピーア、亭主ネッコは党派間の争い解消を願ってゲルフィ党から妻をもらったが、妻の弟ロドリーゴは変らずゲルフィ党、争いは残り、両者の戦いにまで発展する。ドニゼッティ流「ロメオとジュリエット」。

ロドリーゴが姉に会いたいと連絡の手紙をだす。これを仲介した召使が夫の従兄弟ギーノに見せる。彼はこれを不貞と誤解。密かに横恋慕していたこともあり、夫ネッコに彼の陣地まできて告口。ネッコはロドリーゴの反乱に業

をにやしていた上に、この知らせ。夫は妻の浮気現場を押さえるため、帰郷。現場は押さえられず、妻を詰問したが、妻ピアアは実弟であると言い張る。夫は怒り、妻を牢につなげと命令。同時に明朝までに命令がなければ妻の殺害を牢屋番に指示。

横恋慕のギーノが牢のピアアを訪問、愛をうちあけ、受けてくれれば牢から出す、というが、ピアアは会っていたのは弟と断言。ピアアの貞節ぶりにギーノは打たれ、あわてて、夫のいる戦場へいそいだが、途中ゲルフィ党に切り付けられ、やっとの思いでネッロにあい、真実を告げ死ぬ。夜はあけかけていた。

ネッロは事実に驚き城へ急ぐ。弟も姉を救いにくる。生きた妻に会え、喜ぶが、時遅く、ピアアは召牢番が卓上に置いた毒入りの水を飲んでいて。ピアアは、弟と夫の和解を頼んで死んでいく。二人が歌う和解の歌、「死んでいくピアアに」で幕。」

イタリア中部には小さな独立都市が沢山あります。今の規模だと人口密度が平方キロあたり、400人～700人程度でしょうが、当時は遥かに人口は少なかったでしょう。城壁で囲んで、外敵の侵入を防ぐ、それが領主の仕事です。シェーナもそんな都市の一つだったでしょう。党派を作って対抗し、ときには武力衝突も起こった程度に、このオペラを考えたらよいでしょう。横恋慕が二人の死を産んだのは異常で、13世紀では大事件だったのでしょう。「ピアア」の話は有名なダンテが取り上げているけれど、台本作者カンマラーノはバルトロメオ・セステイーニの「ロマン派的伝説」から取材したそうです。

「ピアア」のオペラはヴェネチアのフェニーチェ劇場で初演される筈でしたが、その直前1836年12月13日夜、劇場は火事で壊滅状態になりました。オペラは劇場再建の途中、同地のアポッロ劇場で1837年2月に上演されました。必ずしも好評とはいえなかったこともあって、最後の幕が改作が行わ

れ、ナポリのスイニガッリアで現在の「ピーア」が行われたそうです。更には翌年にローマでの上演で検閲による改作がおこなわれる、という悲劇が起きています。ピーアの呪いでしょうか。

見たDVDはフェニーチェ劇場のもので、主役はイタリアで人気のチオフィでした。チオフィの演技と歌は際立っていましたが、舞台の作りが抽象化されていて、極めて平面的でした。この程度の知名度のオペラは屡みるものではありませんから、筋立てと舞台とが見ていて一致するのに時間がかかります。私にはわかるまでに3~4度見る必要がありました。なおこのオペラ劇場はスカラ座ほどではないが、イタリアでは一流の筈です。

悲劇はオペラ以外でもおきました。1837年5月始めドニゼッティは家と馬車を持ったのに、6月13日三人目の子供が生まれて死亡、妻も7月30日に死亡という大悲劇が起きました。

マイホームパパにこれ以上の悲しい出来事はありません。失意の底にいたガエダーノ、これに追い討ちをかけたのはナポリのコレラ渦です。毎日何百人の人が死にました。彼はコレラを避けるための助言を友人に絶えずしたそうです。

この悲劇から彼を救ったのは10月ナポリで上演される、次の作品「ロベルト・デヴリュ」の製作でした。

イタリア・オペラ史(118)「ロベルト・デヴリュ」愛ゆえの処刑  
本文



➤ 晩年のドニゼッティ自画像

「アンナ・ボレーナ」「マリア・スチュアルダ」とともに女王3部作と呼ばれているものです。そのうち二つが女王エリザベート1世の話。彼女は1600年ごろの女王、施政者としてに力量とともに色恋沙汰でも天下に名を知らしめました。ロッシーニにも「女王エリザベッタ」という名作がありますが、これは同じ女王を扱っています。

女王は恋が意のままにならぬと人を殺しさえします。古典派ロッシーニでは女王の格調が維持されていますが、ロマン派ドニゼッティになると情念が作品にこもるのを厭わないから、話は現実味を帯びてきます。前作「マリア・スチュアルダ」では嫉妬がスコットランド女王スチュアルダを死刑にしました。

「サーラはノッティンガム公爵の妻、題名のロベルト・デブリュー（エセックス伯）の恋人であった。女王の命令でノッティンガム公爵と結婚させられた。この事実をロベルトは知らなかったが、彼女から教えられ、二人は2度

と会わない約束をする。ロベルトは征服した敵への寛大な扱いが裏切り行為とみなされ、裁判にかけられる。二人の議員の専決事項と決まり、女王は最終判断のみに関わると決まる。

裁判が終わり、二人は女王にロベルトは死罪に値すると報告、彼の身边から発見した女性のマフラーを提出する。公爵は助命を女王に嘆願、女王は女性のマフラーをみせ、ロベルトを詰問、公爵はマフラーが妻のものとする。知らぬ女王は女性の名を言えば許すが、言わねば死罪と宣言、ロベルトは死を選ぶ。

ロベルトからサーラへの最後の手紙で、彼が送った王家の指輪を女王に示せば、死罪は免れるとしらせ、サーラは急いで女王に会おうとするが、夫の公爵がこれに気づき、妻と親友の裏切りに怒りを爆発させ、妻が女王に会うのを阻止する。

女王は自らの判決に悔いていたが、そこへサーラが指輪をもって登場、女王は驚き、死刑の中止を命令する。時既に遅く、処刑は行われていた。女王は遅参を罪に公爵とサーラを逮捕、自らは退位した。」

サルヴァトーレ・カンマラーノの台本であり、実話に基づいています。悲しみの只中にあったドニゼッティはこの曲あたりから作風が変わったとされています。私がみた感じでも美しいアリアより、会話に近い、レシタチーボと思えるところが多く、自然に歌に変わって行って、大変迫力があります。イタリア・オペラ本来の姿である、「先ず言葉次に歌」という姿が浮かびあがります。

この曲の人気は最初それほどでもなくじょじょに盛り上がったと、ドニゼッティは言っています。そのわけを上演が続いたフランスで聴衆がイタリア語がわからないせいに帰しています。これはオペラの本質を言えて妙です。私がみたDVDはハンブルグの歌劇場という超一流のもので、エリザベッタはグルベルローバがやっていました。ただ、背広とスーツの舞台です。最近

の演出はこの手のものが普通ですが、エリザベス女王が女社長のような格好で、我が思いを述べているのは馴染めないし、ロベルトがすげなく袖にするのも見るに耐えません。しかし二度三度とみると、そんなことは殆んど気にならなくなります。寧ろ背広ドレスゆえのきびきびした動作に好感を感じてしまいます。

## イタリア・オペラ史 (119) 「連隊の娘」 パリ転居

### 本文

悲しい思いや不誠実に出会うと、そこから消えてしまいたくなるのは誰も同じでしょう。ドニゼッティは妻子の死に加え、親しい歌手ヌリのために書いたオペラの検閲と不許可、さらにはナポリとミラノの音楽院の学長就任への不誠実な対応など、嫌になる出来事が重なって、1838年10月9日ナポリの家をそのままにして、船で、「パリへ散歩」（彼の言葉）にでてしまいます。パリとはと思いますが、大分前から熱心な誘いを受けていたし、ネリというフランス語の教師がいた野を思うと不自然ではありません。

パリでの第一作が「連隊の娘」です。ロッシーニの「オリー伯爵」を思い出すフランス語のブッフアです。（1840年2月初演）

下記の筋はイタリア語版です。

「捨て子だったのが連隊のマスコットとして育てられたマリー、成人し、酒保（調理場）で働く。ある時、崖から落ちかけたとき、スイスの青年トーニオに助けられ、思いをいやく。一方トーニオはマリアのハートをいるため、兵隊になる。二人は愛の告白、結婚を誓う。

マリーを育てたスピリーチオ軍曹がベルケンフィールド侯爵夫人と話していると、マリーが侯爵夫人の姪であることが、わかり、戦争のためこの地に避難していた侯爵夫人はパリに帰るにあたり、マリーを連れてかえりたい、といいだす。マリーも同意したので嘆くトーニオと連隊をあとに二人は去る。



パリでの暮らしは豊かなもの、マリーはダンスや発声の訓練にあけくれ、しかし野生児の彼女には合いません。スピリーチオは怪我をしてこの家の執事になっていて、マリーに同情している。そこに連隊の兵士がやってきて激励、大尉に昇進したトーニオもくる。侯爵夫人にマリーはトニーを恋人と紹介するが、侯爵夫人は許さず、彼を追い出し、マリーの相手はクラークントロップ公爵ときつく言い渡す。侯爵夫人はスピリーチオを呼んで密かに、マリーは私と恋人の間に来た子ともらす。

結婚に日、マリーが遅いので、クラークントロップ公爵夫人が怒っている。マリーは侯爵夫人にどうしてもサインしなければいけないかと、訊ね、一方トニーは部下をつれ、彼女の意思尊重を迫る。マリーは母の意志を尊重しサインする決意を固めるが、そのとき母は折れ、マリーの意思尊重を認め、トニーとマリーは結ばれる。」

フランス語の台本に作曲、後刻スカラ座用イタリア語翻訳にドニゼッティ自身手をいれたそうです。このオペラが「カルメン」のようにフランス風オペラになっていて、喋りと歌の分離がはっきりし、語りにイタリア風のレシタチーボ感がなく、そのせいかイタリア以外での人気は高いが、イタリアではブッフアとして評判は今一だったとか。

私がみた DVD はデビーアのマリーである、イタリア版、フランス版は CD に僅かにある程度です。「愛の妙薬」のような名作には感じられません

「悲劇的なドニゼッティ・オペラの森の空気を断ち切って飛び進む、優美で目も鮮やかな蝶のようなオペラであり、中心にいる優雅で、生気にみちた娘は、活気あふれる完全な若さの口層的な象徴です。ドニゼッティはその若さを、1人ぼっちのつらい日々の中で、絶望にうちひしがれながら探し求め、見つかられず、芸術を通して創作した」といっていいと思います。

イタリア・オペラ史(120)「ラ・ファボリータ」は聖談？

本文

スペインを舞台としたナポリ・オペラは珍しいと私は思います。政治的に近いから差しさわりが多いのかもしれませんが。スペインは宗教的な国だし、そこを舞台としてもつまらない話しになる筈ですが、ドニゼッティはあえて挑戦しました。その前に「ポリウード」という聖人を扱ったオペラを書きましたが、ナポリの検閲官が「恐れ多い話しを下賤なオペラで扱うな」と禁止しました。これは「殉職者」としてフランス語でパリで発表されます（1840年4月）。「ラ・ファボリータ」もフランス語で先ず発表され、後にイタリア語に直されます。「ポリウート」のイタリア語判は彼の死後 1848年10月にナポリで行われました。（死は4月8日）

「スペイン、カスターリア地方の聖職者の息子が恋をしてしまう。会うために目隠しされ、出会いの場所につれていかれる。彼女は身分を明らかにされたくないからであるが、恋は盲目、あるとき、会う瀬を楽しむとき、彼女が王から呼び出された。彼はこれを彼女が高貴な身分の証ととり、自らを軍務におき、手柄を立て、社会的地位向上をもくろんだ。

彼の勇気は抜群で、周囲を荒らしていたイスラム人を追い出し、カスターリアの地に平和をもたらした。この英雄的行いに王は感激し、彼の勲功を讃え、望むものを与えると言明した。彼は彼女と結婚したいと申し出た。王は彼女がかわいがっている2号であるのに驚きながら、彼女の気持ちが自分からはなれ始めたのを感じていたもので、これを認めた。彼は彼女が王からの払い下げ品とは露知らず、痛く感激、3時間後の結婚式に突入していく。

彼女は彼の指名を感激しながらも、彼に事前に事実関係を知らせておく必要を感じ、下女に伝言を依頼する。王の悪意から下女は拘束され王女の意が伝わらぬまま、式に突入する。周囲の噂は彼に伝わり、彼は烈火の怒りで、王から与えられた栄誉を一切拒否、父の聖職をつぐ。彼女は事実を知ってもらおうと、弱りきった体を引きずり彼を探しあてる。彼は彼女の誠意を認める

が、彼女の息は切れてしまう。」

2号はレオノーラ、息子はフェルナンド。

初演は1940年12月2日です。(パリ・オペラ座)晩年の作品です。これが「ニズイタの天使」というオペラを色々直して作った作品であるのは有名な話です。「ニズイダの天使」が依頼した劇場の倒産で発表できなくなった為です。私が見たDVDは1971年NHKが招聘したイタリア・オペラ団によるもので、コソットとクラウスがやっています。単細胞な息子と、苦勞を重ねた王女のやりとりが見事に現れていて、胸を打ちます。他にDVDを知りません。

このオペラのDVDが今見えないのは不思議です。当初から大変な人気でリストはワイマールでの公演に熱中し、ワーグナーは自分の金の無さもあって、オペラの編曲を様々にやっています。ピアノのソロや4手の連弾、弦楽4重奏。今も二つのヴァイオリン用に編曲したのは手に入ります。つまり大変メロディが美しいということでしょう。

この頃つまり「ルチア」の成功のあとですが、ドニゼッティは人気ものでパリで作曲したあと、ナポリへとび、更にウィーンでもオペラを作っています。彼の性格が異常になってくるのは1945年ですから、最後の花が咲いたときでしょう。

なおこのオペラにはジャコモ修道院の修道士長の娘が王の正妻という複線が張られていて、修道院と王家が争うという図式が現れています。後にヴェルディは「ドン・カルロ」で現世の王と宗教側の主大審問官とがそら恐ろしい争いをするオペラを書いています。その前段とみると、当時の世相が覗え一層興味がわきます。

## イタリア・オペラ史 (121) 「シャムニーのリンダ」 (神の恩寵)

### 本文

ドニゼッティのオペラでは1840年頃から神の話題が重要になります。これは1842年の作。既出の「ラ・ファアボリータ」は1840年末。どちらも直接信仰を扱ってはいないが、神との関わりが感じられます。これはハッピーエンドの作品ですが、人には定められた運命があるのを示したいように私は感じます。ドニゼッティは絶頂期の数年前女性遊びをして梅毒にかかり、絶頂期の37歳(1934年)ころから自覚症状が現れ、激しい頭痛に襲われ始めます。「ルチア」の死の場面「「愛しい人よ君は先に天に行くのか」のエドガーの告白はその予兆とさえ言われています。彼はこれを宿命と受け取ったようで、この頃のオペラから宿命との戦いがしばしば題材になっているように私には感じられます。「シャムニーのリンダ」は執拗に訪れる幸福を神の恩寵ととらえているようです。劇の進行を遠くから誰かが眺めてりうように感じます。

「リンダは恋人カルロとの逢う瀬に遅刻し、不安を感じながら、逢えず帰宅すると、横恋慕する侯爵が待ち構えている。彼女を2号にすることを前提に父や母と小作契約をする気である。その悪巧みを見抜いた村長はリンダの危険を察し、出稼ぎ農民と一緒にパリへ行かせる。恋人カルロは実はシルバーノ伯爵で、身分を隠してリンダと交際していたが、パリ居住を契機に彼女に家を与える。身分不相応な暮らしが始まり、騒ぎがいくつかおき、彼女は精神的に異常を起してしまい、帰村する。シルバーノ伯爵は他の女性との縁談を拒否し、ひたすら異常になったリンダの正常化をのぞんでいたが、あるとき、何時ものように彼の愛の歌を聴かせていると、突如正常にもどり、二人は結ばれる。」

この少女趣味の作品はドニゼッティがウィーンで書いたドイツ人用のもので、音楽は薄く、必然を感じさせる流れが続きます。1942年の作品です。

ハッピーな結果になるのに、悲しい音楽が振りまかれています。

私のもつDVDはグルベローバが主演のチューリッヒ歌劇場のものでその他にもDVDはあります。この作曲でウィーンへ行っているとき、彼は宮廷音楽家の称号をもらい、年金を与えられます。モーツァルト以上の榮譽であるのに、作品には人生の終末を感じさせるものがあります。

ドニゼッティに登場する人物は、内に不安をかかえ、犠牲者の立場で行動し、孤独だという特徴があると私は思いますが、これが現代人の抱えている不安と共通していると私は思うし、この傾向が晩年の作品に強く感じられます。ハッピーエンドなのに「シャムニーのリンダ」は寂しい曲です。因みにシャムニーはスキーで有名なスイスの地名です。

## イタリア・オペラ史 (122) 老人の恋「ドン・パスクワレ」

### 本文

老人が若い女性に恋をする話はオペラに格好の題材です。「セビリアの理髪師」がそうでした。この「ドン・パスクワレ」もそうで、このあと、ヴェルディは「ファルスタッフ」を書いています。3つとも傑作ですし、ブッフアに近いけれど、あとの二つは老いの孤独を扱っていて、死と向き合っていますからセリア以上にセリアといえます。。

「ドン・パスクワレは老人、甥のエルンストと暮らしているが、甥が結婚をしたがらないから、自分の資産の処理に困り、彼を勘当し、自ら結婚しようと思いたつ。友人の医者、マチェスタに相手の紹介を依頼し、マチェスタは自分の妹ノリーナが最適であると連れてくる。ノリーナは未亡人でエルンストの恋人でもあるが、マチェスタは彼女を修道院を出たばかりのおぼこ娘と紹介する。ドン・パスクワレはノリーナの美貌にひと目ぼれ、早速結婚の契約。契約直後、ノリーナは変身して、家の改修、装身具の購入、召使への命令、外出と思う存分な行動、はては主人に平手打ちをするなど傍若無人。

老人は離婚を決意する。一策案じてこのじゃじゃ馬女を甥のエルンストの相手とし、彼に財産を与えると宣言。ここでエルンストとノリーナの仕組んだ芝居がばれ、老人はエルンストの恋人がノリーナであることを知らされる。人のよいドン・パスクワレは二人の関係をみとめ、めでたしめでたしで幕となる。」

馬鹿げた話しですが、音楽がよくかけていて人気作品です。これ以後、この種のブッフアは現れません。私がみたDVDではコルベッリ、メイ、シラクーサが演じています。1843年の作、彼の最後の作品群の一つで、パリのイタリヤ座のために書かれたものです。彼の死は1848年ですが、45年以後、梅毒に由来する脳髄の悪化で、社会活動はできなくなっています。

ドニゼッティは妻ウイルジーニヤの1837年の死後、結婚をしていません。噂はあったもせよ、1842年8月、シュテルリッヒ公爵の二人の娘と知り合うまで、何もなかったと考えてよいようです。年齢的に不可能な愛ですが、二人の内の一人と彼は深い関係に陥ったようです。彼は始めドン・パスクワレのように事態を笑って済ませる勇気があると思っていました。彼女のための作品も増えていきました。その一人とはジョアンナのようなようでした。1844年彼は再びナポリを訪れます。そしてシュテルリッヒ公爵一家に大歓迎を受けます。しかしジョアンナとの中が進んだとは残された手紙からは分かりません。ドニゼッティが希望をもっていたのは確かであるとしても苦い失望感が続いたようです。そして決定的な年、1845年が来てしまいます。あらゆる精神的機能が年末には劣化してしまい、恋も終わります。

それからお彼は3年生きます。

1846年1月彼の記憶力や判断力、自制心も劣えたので入院させられます。更にマヒ状態になって、入院の必要がなくなると、ベルガモに戻され、バゾーニ男爵夫人と娘にひきとられ、1848年4月8日息を引き取ります。この年にイタリアの独立戦争が始まり、ヴェルディは「海賊」を書きました。